

## ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究IV

### — 告知および早期療育・教育の実状 —

|          |       |
|----------|-------|
| お茶の水女子大学 | 品川 玲子 |
| お茶の水女子大学 | 渡辺 千歳 |
| 国際基督教大学  | 荻原 美文 |
| お茶の水女子大学 | 藤永 保  |
| 公文公教育研究所 | 佐々木丈夫 |

## A Survey of Child Rearing Styles among Mothers Having Children with Down Syndrome "Kokuchi" and Early Therapeutic Education

|                                    |                   |
|------------------------------------|-------------------|
| Ochanomizu University              | SHINAGAWA, Reiko  |
| Ochanomizu University              | WATANABE, Chitose |
| International Christian University | OGIHARA, Mifumi   |
| Ochanomizu University              | FUJINAGA, Tamotsu |
| Kumon Tohru Institute of Education | SASAKI, Takeo     |

ダウン症の子どもを持つ 126 名の母親の質問紙調査から以下の結果を得た。(1)以前に比べ医師は、告知の際母親により多くの早期療育に関する情報を与えるようになってきている。しかし告知時の医師の態度（話の肯定的な度合いや親切さ）やダウン症についての説明の正確さに関しては、以前に比べて改善されているという母親の評価はみられなかった。(2)多くの母親が多種類の早期療育・教育を早い時期から頻繁に行っていた。なかでも、知的働き掛けが、以前より早い年齢で始められるようになってきていた。

**【キー・ワード】**ダウン症児, 母親の養育態度, 告知, 早期療育

Based on the questionnaire data answered by 126 mothers who have children with Down syndrome, the following results were reported. (1)At Kokuchi (notice of syndrome), doctors gave these mothers more information about early therapeutic education than before, but neither doctor's sympathetic attitudes nor the accuracy of their explanation on Down syndrome has improved. (2)Many mothers frequently gave their child various kinds of early therapeutic education. Especially intellectual kinds of such education (reading/writing words/numbers, teaching big/small) were started earlier than before.

**【Key Words】** Children with Down syndrome, Mother's child rearing styles, "Kokuchi", Early

## therapeutic education

## 問 題

本稿はダウン症の子どもを持つ母親を対象とした調査研究の一部、第 報である。これまでの 3 報では、1997 年に実施した質問紙調査の結果に基づき、主に、告知のあり方と早期療育に関わる母親の養育態度について検討した（品川他，1997；品川他，1998；渡辺他，1999）。

告知の実状が変化したのかどうかについて、平均年齢で分けた低・高齢群の差異によって分析したところ、以下の結果を得た。以前に比べ告知時により多くの早期療育に関する情報を母親に伝えるようになっており、その点では改善の傾向がみられたものの、告知時の医師の態度（親切さ、希望の持てる言い方だったか）については以前に比べて変化はみられなかった。告知時の母親の心情については解釈可能な結果は得られなかった（渡辺他，1999）。さらに自由記述の分析結果からは、母親達の望む告知として、医師がダウン症について正確な知識を伝達し、早期療育の意義を示し、それに関して相談できる療育機関や親の会の存在を伝えるべきことなどが指摘された（渡辺他，1999）。

早期療育・教育に関しては、以前に比べ、より早い時期に最初の発達や療育の相談を受け、親の会へ入会し、療育・教育への意欲が芽生え、より多くの種類の働き掛けを家庭の内外で行うなど、母親の養育態度の変化が顕著であった（渡辺他，1999）。

上述の結果をふまえ、ダウン症児を持つ母親の養育態度についてさらに考察を深めるために、新たな質問紙調査を実施する。今回の調査では、前回調査で指摘された調査対象の偏りを減らす

ため、質問紙配布対象の拡大を試みる。また、前回調査の告知についての自由記述の結果をもとに、告知に関する項目に改良を加え、告知の実状とその変化について検討する。早期療育・教育に関しては、その実態をより詳しく知るために、家庭内外で行われると思われる言語・認知的、運動・感覚的、社会的、知的の各種の働き掛けを、母親が答えやすいようになるべく具体的な項目に設定し、それぞれの働き掛けの詳細を尋ねた。また、早期療育・教育の効果について検討するための第一段階として、ダウン症児のことばと数の理解の発達状況について考察を試みる。ダウン症児の知的発達の現状とその可能性を探ることは、個々のダウン症の子どもとその家族にとってだけでなく、社会的にも重要な意味を持つと考えられる。さらに、早期療育・教育のあり方と、子どもの発達の両者に深く関連していると思われる、母親及びダウン症児の性格態度についても検討する。本稿では告知と早期療育・教育の実態に関する結果を、続く第 報ではことば・数の理解の発達状況を、第 報では母親及びダウン症児の性格態度を、それぞれ報告する。

## 方 法

調査対象：学校外教育機関である K 教育研究会に所属し国語と算数、あるいはいずれか一方を学習しているダウン症生徒の母親 261 名に、研究会の指導者を通して質問紙を配布、回収し、88 名から回答を得た。さらに、東京都内のダウン症児の親の会の会員 45 名に会の代表者を通しての配布と郵送により回収できたのは 38 名であった。合計の配布数は 306、回収数は

126, 回収率は 41.2%であった。

**調査期間**：1999年8月～9月

**質問紙**：以下の(1)～(6)の内容から構成される。(1)フェイスシート, (2)告知, (3)早期療育・教育, (4)ことばと数の理解の発達状況, (5)当該児の性格態度, (6)母親の性格態度。このうち, 本稿では(1)～(3)について述べる。(4)は第 報で, (5)と(6)については第 報でそれぞれ報告する。

「フェイスシート」では, 当該児の性別, 生年月, 何人兄弟の何番目か, 合併症の有無, 親の会入会状況とその入会時期について, 回答を求めた。

「告知」に関しては, 前回調査の告知に関する項目をその自由記述の結果等を考慮して改良を加えたものを用いた。告知時の母親のダウン症に関する知識の程度, 告知の時期, 最初に告知を受けた人は誰かについて, それぞれ与えられた選択肢の中から最も当てはまるものを選んでもらった。さらに, 医師の告知について, その話は肯定的であったか, 態度は親切であったか, ダウン症についての説明は正確であったかの3項目のそれぞれに関して, その程度を5段階で評定してもらった。次に, 早期療育の効果や重要性, 早期療育に関する具体的な情報(専門機関の紹介等), 障害児の親の会に関する情報の3点についての話が告知時にあったかどうかも尋ねた。最後に, 告知時の母親の心情を, 絶望的, 混乱, 孤立感, 将来の不安の4種類の尺度でそれぞれ5段階で評定してもらった。

「早期療育・教育」では, 家庭や専門機関で行うと思われる16種類の働き掛けのそれぞれについて, 実施の有無(「以前行っていた」, 「現在行っている」, 「行ったことはない」から選択), 時期(開始・終了時の当該児の年齢を記述), 場所(「主に専門機関で」, 「主に

家庭で」, 「両方で」から選択), 頻度(「毎日1時間以上」, 「毎日1時間未満」, 「週2, 3回」, 「週1回」, 「月2～3回」, 「月1回以下」から選択)の4点に関して回答してもらった。

## 結果および考察

### (1)フェイスシート

当該児の性別, 年齢, 何人兄弟の何番目か, 合併症の種類とその有無, 親の会の入会状況とその入会時期(入会時の当該児の年齢)についての結果を表1に示した。

男女ほぼ同数であり, 年齢の開きは大きかった(2～32歳)。一人っ子の割合は少なく

表1 フェースシート項目の結果

| 項目        | 回答数 | 平均(歳) | SD(歳) |
|-----------|-----|-------|-------|
| 年齢        | 126 | 11.47 | 5.37  |
| 性別        |     |       |       |
| 男         | 62  |       |       |
| 女         | 63  |       |       |
| 無回答       | 1   |       |       |
| 兄弟        |     |       |       |
| 1人っ子      | 15  |       |       |
| 2人兄弟      | 60  |       |       |
| 3人兄弟      | 36  |       |       |
| 4人兄弟以上    | 13  |       |       |
| 無回答       | 2   |       |       |
| 何番目の子か    |     |       |       |
| 1番目       | 44  |       |       |
| 2番目       | 54  |       |       |
| 3番目       | 19  |       |       |
| 4番目以降     | 7   |       |       |
| 無回答       | 2   |       |       |
| 合併症(複数回答) |     |       |       |
| 心臓疾患      | 66  |       |       |
| 消化器系疾患    | 8   |       |       |
| 視力障害      | 34  |       |       |
| 聴力障害      | 12  |       |       |
| 脳波異常      | 1   |       |       |
| その他       | 24  |       |       |
| 親の会       |     |       |       |
| 現在入会      | 93  |       |       |
| 過去に入会     | 12  |       |       |
| 未入会       | 20  |       |       |
| 無回答       | 1   |       |       |
| 親の会入会時期   | 103 | 2.21  | 2.98  |

(12%)、その多くが兄弟姉妹を持っていた(2人兄弟が48%、3人兄弟以上が39%)。また、2番目以降の子ども(63%)は、一人目の子ども(35%)の割合を大きくうわまわった。合併症に関しては、過半数が心臓疾患を持ち(52%)、視力障害を持つ子どもも多かった(27%)。

83%の母親が親の会に入会し(過去に入会も含めて)、その入会時期も早い。さらに、子どもの平均年齢で2群に分けて、親の会への入会時期をt検定で分析したところ、平均年齢以下の低年齢群の方が、平均年齢以上の高年齢群より早く親の会に入会していた( $t=2.79$ ,  $df=99$ ,  $p<.01$ )。このことから、時代が下るにつれて、親の会の存在は、ダウン症の子どもが生まれてからより早い時期に親に伝えられ、より早い時期に入会するようになって来ていると考えられる。

## (2)告知

告知に関する結果をまとめたのが表2である。告知時に少しでもダウン症に関する知識を持っていた母親は1/3弱であった。また、出産後4週間目までには70%、6ヶ月までには90%を超える母親が告知を受けていた。最初に告知を受けたのは、「両親」、「母親のみ」、「父親のみ」がほぼ同数であった。

医師の告知については、3尺度とも平均が3以下であることから、どちらかといえば、話は肯定的で態度も親切であり、ダウン症の説明も正確という評価がなされている。ここでも平均年齢で分けた低・高年齢群でt検定を試みたが、有意差はなかった。前回の調査でも類似した尺度で同様の結果を得たが、その時指摘したように、平均年齢で群分けして比較するだけでは不十分であるので、今回はさらに以下の2群間で

のt検定も行った。最近告知を受けた群として、2~7歳までの30名(最近群)と以前告知を受けた群として15~32歳までの31名(以前群)を比較したが2群間で有意差はみられなかった。

また、方法で述べた3種類の情報(早期療育の効果や重要性、早期療育に関する具体的な情報、障害児の親の会に関する情報)のすべてにおいて、情報を与えられた母親(25~37%)よりも、与えられなかった母親(61~72%)の方が多かった。上述の低・高年齢群および最近・以前群で比較したところ、低年齢群および最近群の母親の方が高年齢群あるいは以前群よりも、3種類すべての情報について与えられた割合は高い傾向がみられた。しかしどちらの2群間においても2検定での有意差はみられなかった。そこで、3種類のうちの幾つの情報を各母親が与えられたか、その情報数を算出し、低年齢群および最近群の方が、情報数の多い母親の割合が高いかどうかについて検討を試みた。ここでは、2あるいは3個の情報を与えられていたものを情報数の多い母親、0および1個の情報しか与えられなかったものを情報数の少ない母親とした。低・高年齢群では有意差はみられなかったものの、最近・以前群においては、最近群の母親の方が、医師から告知時に、より多くの早期療育に関わる情報を得ているという結果が得られた( $\chi^2=4.25$ ,  $p<.05$ )。

母親の心情を問う4尺度は、すべて否定的でばらつきも少なかった。なかでも将来の不安は最も強く感じられ、混乱や絶望の程度も高かった。相対的に、孤立感を感じる程度は弱いという結果であった。この4尺度に関しても、同様にt検定で低・高年齢群および最近・以前群の差を検討したが、有意差はみられなかった。

表2 告知に関する項目の結果

| 項目                          | 回答数 | 平均   | SD   |
|-----------------------------|-----|------|------|
| <b>告知時の母親のダウン症に関する知識の程度</b> |     |      |      |
| よく知っていた                     | 12  |      |      |
| 発達程度など少しは知っていた              | 26  |      |      |
| 名前程度でほとんど知らなかった             | 43  |      |      |
| 全く知らなかった                    | 38  |      |      |
| 誤った知識を持っていた                 | 6   |      |      |
| 無回答                         | 1   |      |      |
| <b>告知の時期</b>                |     |      |      |
| 出産後1～7日目                    | 55  |      |      |
| 出産後2～4週間目                   | 38  |      |      |
| 出産後2～6ヶ月目                   | 25  |      |      |
| 出産後6ヶ月以降                    | 6   |      |      |
| 出産前                         | 1   |      |      |
| 無回答                         | 1   |      |      |
| <b>最初に告知を受けた人</b>           |     |      |      |
| 両親                          | 39  |      |      |
| 母親のみ                        | 31  |      |      |
| 父親のみ                        | 38  |      |      |
| その他                         | 17  |      |      |
| 無回答                         | 1   |      |      |
| <b>医師の告知</b>                |     |      |      |
| ①話は肯定的だったか                  | 117 | 2.68 | 1.24 |
| ②態度は親切だったか                  | 122 | 2.38 | 1.26 |
| ③ダウン症についての説明は正確だったか         | 120 | 2.61 | 1.42 |
| ④早期療育の効果や重要性についての話          |     |      |      |
| あり                          | 47  |      |      |
| なし                          | 77  |      |      |
| 無回答                         | 2   |      |      |
| ⑤早期療育に関する具体的な情報             |     |      |      |
| あり                          | 32  |      |      |
| なし                          | 91  |      |      |
| 無回答                         | 3   |      |      |
| ⑥障害児の親の会に関する情報              |     |      |      |
| あり                          | 32  |      |      |
| なし                          | 88  |      |      |
| 無回答                         | 6   |      |      |
| <b>母親の心情</b>                |     |      |      |
| ①絶望的になった                    | 120 | 1.74 | 1.05 |
| ②混乱した                       | 123 | 1.54 | 0.92 |
| ③孤立感を感じた                    | 120 | 2.23 | 1.33 |
| ④将来の不安を感じた                  | 121 | 1.41 | 0.78 |

注. 医師の告知の①～③, 母親の心情の①～④の評定は、「とてもあてはまる」, 「少しあてはまる」, 「どちらでもない」, 「少しあてはまらない」, 「全くあてはまらない」をそれぞれ1, 2, 3, 4, 5としてその平均とSDを算出した。

### (3)早期療育・教育

**実施の有無**：16種類の働き掛けの実施の有無の結果をまとめたのが表3である。14の働き掛けにおいて、126名中100名以上が過去あるいは現在実施と回答するなど、全体に実施率は高かった。最も実施数の多かったのは「子

もの集団に入れる」で、「言葉掛けをする」, 「文字を読んだり, 書いたりする」, 「数字を読んだり, 書いたりする」, 「人や物の名前を教える」と続く。反対に実施数の少なかったのは「発音, 発声訓練をする」や「リトミックなど音楽に合わせて身体を動かす」であった。

**開始時期**：終了時期については現在継続中のものも多く回答数が少なかったため、開始時期についてのみ結果を報告する(表4)。働き掛けへの取り組みは、言語、音楽や本などの「言語・認知的働き掛け」、体操や身辺訓練などの「運動・感覚的働き掛け」、子どもや大人との接触などの「社会性に関する働き掛け」、かず数え、文字・数字の読み書きなどの「知的働き掛け」という順序で始める傾向がみられた。

この順序の一致の程度を知るため以下の分析を試みた。ある程度の年齢に達していないと知的働き掛けまで行っていないと思われるので、まず学齢期以上の104名のみを対象にした。さらに開始年齢の回答数が少ない5種類の働き掛け(「発音、発声訓練をする」「リトミック・・・」「絵を描いたり、線を引いたりする」「テレビやビデオの教育番組を見せる」「物の大小や量の多少を教える」)を除いた。

**表3 早期療育・教育の実施の有無**

| 働き掛け                 | 実施  | 無実施 | 無回答 |
|----------------------|-----|-----|-----|
| 子どもの集団に入れる           | 120 | 2   | 4   |
| 言葉掛けをする              | 117 | 4   | 5   |
| 文字を読んだり、書いたりする       | 115 | 9   | 2   |
| 数字を読んだり、書いたりする       | 114 | 9   | 3   |
| 人や物の名前を教える           | 114 | 5   | 7   |
| 身の回りのことを訓練する         | 113 | 8   | 5   |
| 人や物の数を数える            | 112 | 6   | 8   |
| 本を読んであげる             | 112 | 7   | 7   |
| 歌、音楽を聞かせる            | 110 | 11  | 5   |
| 物の大小や量の多少を教える        | 109 | 4   | 13  |
| 絵を描いたり、線を引いたりする      | 108 | 13  | 5   |
| 家族以外の大人と接する機会を持たせる   | 107 | 12  | 7   |
| テレビやビデオの教育番組を見せる     | 106 | 15  | 5   |
| 体操やストレッチをする          | 103 | 20  | 3   |
| リトミックなど音楽に合わせて身体を動かす | 90  | 31  | 5   |
| 発音、発声訓練をする           | 90  | 31  | 5   |

注.『実施』は「以前行っていた」と「現在行っている」の合計回答数

**表4 早期療育・教育の開始時期**

| 働き掛け                 | 平均(歳) | SD   | 回答数 |
|----------------------|-------|------|-----|
| 言葉掛けをする              | 0.69  | 1.2  | 106 |
| 歌、音楽を聞かせる            | 1.12  | 2.07 | 100 |
| 体操やストレッチをする          | 1.41  | 2.27 | 101 |
| 本を読んであげる             | 1.44  | 1.2  | 100 |
| テレビやビデオの教育番組を見せる     | 1.49  | 1.49 | 91  |
| 子どもの集団に入れる           | 2.29  | 1.4  | 113 |
| 身の回りのことを訓練する         | 2.32  | 1.31 | 99  |
| 家族以外の大人と接する機会を持たせる   | 2.36  | 2.62 | 97  |
| 人や物の名前を教える           | 2.43  | 1.85 | 100 |
| リトミックなど音楽に合わせて身体を動かす | 2.67  | 2.88 | 84  |
| 絵を描いたり、線を引いたりする      | 2.99  | 2.63 | 89  |
| 発音、発声訓練をする           | 3.66  | 2.96 | 82  |
| 人や物の数を数える            | 4.13  | 2.48 | 94  |
| 物の大小や量の多少を教える        | 4.27  | 2.44 | 93  |
| 文字を読んだり、書いたりする       | 5.04  | 2.25 | 105 |
| 数字を読んだり、書いたりする       | 5.36  | 2.16 | 105 |

最終的に 11 種類の働き掛けの開始時期を記入している学齢期以上の 39 名について、ケンドールの一致係数を求めた。その結果 11 種類の働き掛けの開始順序の一致の程度は高いことが示された ( $W_c = .63$ )。尚、39 名 11 種類の働き掛けの開始順は、126 名 16 種類の開始順の結果と同じであった。

開始時期に関しても、低・高年齢群の間で差がみられるかどうか  $t$  検定を行ったところ、低年齢群の方が高年齢群よりも早く働き掛けを開始しているものが 6 つあった。それらは「絵を描いたり、線を引いたりする」( $t=2.37, df=85, p < .05$ )、「文字を読んだり、書いたりする」( $t=3.75, df=101, p < .001$ )、「数字を読んだり、書いたりする」( $t=3.87, df=101, p < .001$ )、「人や物の数を数える」( $t=3.04, df=90, p < .01$ )、「物の大小や量の多少を教える」( $t=3.09, df=89, p < .01$ )、「家族以外の大人と接触する機会を持たせる」( $t=2.17, df=94, p < .05$ )である。なかでも、文字や数字の読み書き、かず数えや大小・多少の概念を教えるなど、知的働き掛けが以前に比べて非常に早く行われるようになっている。ただし、今回調査におい

ても調査対象の拡大は不十分で、K 教育研究会に子どもを通わせる母親が回答者の 68% を占めたことから、この結果がどの程度一般化できるかは明らかではない。他の働き掛けに関しても有意差はなかったものの、低年齢群の方が早く開始している傾向はみられた。様々な早期療育的働き掛けが、より早い年齢で始められるようになってきている状況を示唆する結果である。最近・以前群間の  $t$  検定でもほとんど同様の結果を得た。異なったのは「子どもの集団に入れる」( $t=2.16, df=54, p < .05$ )でも有意差がみられたことのみである。しかし、この結果は、個々の父母の働き掛けの産物というよりは、障害児を受け入れる幼児教育施設の増加によることが大きいと思われるので、一種の社会的働き掛けと呼ぶ方が適切であるかもしれない。

**実施場所**：実施者中のそれぞれの場所の割合を示したのが表 5 である。“専門機関で”行った(行っている)割合が高かったのは、「子どもの集団に入れる」、「リトミック・・・」、「体操やストレッチをする」、「発音、発声訓練をする」の 4 種類で、“家庭で”行った(行っている)割合が高かったのは「テレビやビデ

表5 早期療育・教育の場所(実施者中の%)

| 働き掛け                 | 専門機関 | 家庭   | 両方   |
|----------------------|------|------|------|
| 子どもの集団に入れる           | 67.5 | 1.7  | 22.5 |
| リトミックなど音楽に合わせて身体を動かす | 58.9 | 16.7 | 18.9 |
| 体操やストレッチをする          | 52.4 | 18.5 | 25.2 |
| 発音、発声訓練をする           | 51.1 | 14.4 | 25.6 |
| テレビやビデオの教育番組を見せる     | 0.0  | 87.7 | 4.7  |
| 本を読んであげる             | 0.9  | 80.4 | 9.8  |
| 歌、音楽を聞かせる            | 9.1  | 70.0 | 18.2 |
| 言葉掛けをする              | 9.4  | 53.0 | 29.1 |
| 文字を読んだり、書いたりする       | 15.7 | 20.0 | 60.0 |
| 身の回りのことを訓練する         | 7.1  | 37.2 | 53.1 |
| 数字を読んだり、書いたりする       | 22.8 | 16.7 | 52.6 |
| 人や物の数を数える            | 10.7 | 29.5 | 50.9 |
| 絵を描いたり、線を引いたりする      | 14.8 | 32.4 | 46.3 |
| 物の大小や量の多少を教える        | 10.1 | 33.0 | 44.0 |
| 人や物の名前を教える           | 8.8  | 43.0 | 43.0 |
| 家族以外の大人と接する機会を持たせる   | 29.9 | 24.3 | 31.8 |

オの教育番組を見せる」, 「本を読んであげる」, 「歌, 音楽を聞かせる」, 「言葉掛けをする」の4つであった。「両方で」行った割合が高かったのは「文字を読んだり, 書いたりする」, 「数字を読んだり, 書いたりする」, 「身の回りのことを訓練する」, 「人や物の数を数える」の4種類であり, 残る4つの働き掛けでは, 3種類の場所の割合に大きな差はみとめられなかった。全体的に見て, 多くの働き掛けが家庭で熱心に実施されている様子が窺われる。低・高齢群間, 最近・以前群間のいずれにおいてもその傾向に差はみられなかった。

**頻度**: 実施者中のそれぞれの頻度の割合を表6にまとめた。13の働き掛けで毎日行った(行っている)割合が1/3を越え, 多くの母親が多種類の頻繁な働き掛けを行っていることが示された。ここでも低・高齢群間, 最近・以前群間で比較を行ったが差はみられなかった。

### まとめ

告知の実状の変化については前回調査と類似した結果を得た。すなわち, 以前に比べ, 医師

は告知時に母親により多くの早期療育に関する情報を伝達するようになってきてはいるものの, その話がどの程度肯定的であったか, 態度がどの程度親切であったか, およびダウン症についての説明がどの程度正確であったかに関して, 母親の評価に変化はなかった。告知時の母親の心情についての変化もみられなかった。ただしこのような質問紙に協力してくれる母親, 特にもう大きくなった子どもを持つ母親は, どちらかと言えば良い告知を受けその後の子どもの成長も順調である可能性が高いと推測されるため, さらに調査対象を広げこの点を検討する必要があると思われる。

早期療育・教育に関しては, 全体的に非常に熱心なその実状が報告された。また, 様々な早期療育的働き掛け, なかでも知的働き掛けが, より早い年齢で始められるようになってきていた。「結果・考察」でも述べたように, 今回の調査においては親の会を通して質問紙を配布して調査対象の拡大を試みたものの, 結果としてやはりK教育研究会に子どもを通わせる母親が回答者の多数を占めたことから, これらの結果を早急に一般化することはできないと思われる。

表6 早期療育・教育の頻度(実施者中の%)

| 働き掛け                 | 毎日   | 週2, 3回 | 週1回  | 月2~3回 | 月1回以下 |
|----------------------|------|--------|------|-------|-------|
| 言葉掛けをする              | 79.5 | 4.3    | 0.0  | 5.1   | 2.6   |
| テレビやビデオの教育番組を見せる     | 69.8 | 15.1   | 3.8  | 1.9   | 0.0   |
| 身の回りのことを訓練する         | 66.4 | 7.1    | 4.4  | 0.0   | 1.8   |
| 歌, 音楽を聞かせる           | 66.4 | 15.5   | 8.2  | 3.6   | 0.0   |
| 子どもの集団に入れる           | 60.8 | 13.3   | 6.7  | 1.7   | 4.2   |
| 文字を読んだり, 書いたりする      | 58.3 | 23.5   | 8.7  | 0.0   | 0.0   |
| 人や物の名前を教える           | 54.4 | 9.6    | 8.8  | 3.5   | 1.8   |
| 本を読んであげる             | 53.6 | 21.4   | 7.1  | 2.7   | 1.8   |
| 数字を読んだり, 書いたりする      | 53.5 | 21.9   | 9.6  | 1.8   | 0.0   |
| 人や物の数を数える            | 49.1 | 17.0   | 10.7 | 1.8   | 0.9   |
| 家族以外の大人と接する機会を持たせる   | 47.7 | 13.1   | 9.3  | 11.2  | 1.9   |
| 絵を描いたり, 線を引いたりする     | 43.5 | 18.5   | 15.7 | 6.5   | 0.9   |
| 物の大小や量の多少を教える        | 39.4 | 13.8   | 16.5 | 4.6   | 2.8   |
| 体操やストレッチをする          | 29.1 | 20.4   | 29.1 | 13.6  | 6.8   |
| 発音, 発声訓練をする          | 25.6 | 7.8    | 22.2 | 15.6  | 14.4  |
| リトミックなど音楽に合わせて身体を動かす | 23.3 | 17.8   | 40.0 | 7.8   | 5.6   |

る。今回の調査では、親の会を通して得られた回答者の中にも K 教育研究会に所属しているもの含まれていることがわかっており、K 教育研究会と親の会との間の比較分析は行わなかった。この点は今後の課題として残された。

## 引用文献

品川玲子・渡辺千歳・荻原美文・藤永 保・佐々木丈夫. (1997). ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究 : 研究計画と質問紙調査の単純集計. *発達研究*, **12**, 1-9.

品川玲子・渡辺千歳・荻原美文・藤永 保・佐々木丈夫. (1998). ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究 : 事前の知識及び告知のあり方と養育態度. *発達研究*, **13**, 1-10.

渡辺千歳・品川玲子・荻原美文・藤永 保・佐々木丈夫. (1999). ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究 : 1.告知のあり方と養育態度およびサポートの関係 2.自由記述の分析. *発達研究*, **14**, 1-18.

## <謝 辞>

本調査にご協力いただいた K 教育研究会および都内ダウン症親の会の皆様に厚く御礼申し上げます。

